



# 楷



## 岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY  
LIBRARY BULLETIN

No. 18

1993  
OCTOBER

特集／図書館から情報館へ

## 21世紀を展望する大学図書館

— 本学の現状と課題 —

好 並 隆 司

### はじめに

萬成先生の後を承けて5月1日より附属図書館長に就いて約4ヶ月を経過しました。今までは、一研究者として都合に依って適宜、本館を利用させていただいたにすぎませんが、図書館の現在の機能とか位置付けなどを知って、役割の重いことを日々感じているところです。

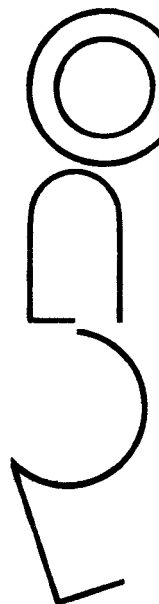
附属図書館は、大学開学以来の歴史と相い並んだ歩みを重ねており、歴代の館長はじめ多くの職員の方々が努力を続けてこられた経緯があり、その成果をふまえて正すべき点は正し、継承する点は、大切にして職責を果たすつもりでいますので、関係各位のご理解・ご協力をお願いしたいと存じます。本誌にスペースをいただきましたので、この機会に私の所感を述べさせていただきます。

### 1 大学図書館の位置と現状

元国立国会図書館副館長の酒井悌氏がかつて金沢工大の図書館の診断をされて、「図書館の体をなしていません。そもそも附属という発想がおかしい。図書館は大学の中心にあるべきものではないか」と言われたそうです。

金沢工大では、その提言を容れて、諸学部“附属”の実態を改め、図書館の予算権と企画権を学部教授会から図書館へ移行させました。これはライブラリーにおける「教育センター」機能の追求が、ひいては「研究センター」として一流のものたらしめ、それが地域やOBにとつての「情報センター」となるという哲学がそこにある（日垣隆氏の指摘）ということでしょう。

翻って、わが岡山大学を酒井悌氏が診断され



たならばどういわれるでしょうか。

私の偏見かもしれませんが、従前の金沢工大とほぼ同様の判定を下されるのではなからうかと思えます。

各学部の研究者が必要な（特に自分の研究だけの）図書を「自由に」購入し、研究室ないし資料室に貯え、極言すれば当面不用の図書を附属図書館に収蔵しておくのが実態ではないのかと感じます。

このことは私自身もやっていたことであって余りいばれた発言はできないとも一面自覚しているのですが、岡山大学全体の研究・教育の発展のためには、情報センターとしての「中央」図書館機能が緊急に構築されなければならぬと考えています。

ただ図書館は、本来研究者に対するサービスという側面があるのですから、すべての図書を上述の方針で収書するというわけにはいかないでしょう。

とりあえず、私の思うには、特別図書・全学共用図書は収書委員会のようなものを図書館の管轄下に組織し、そこで必要で重複購入をせぬような注意を払い、全学的視点で有益な図書を収集することから始めたいと考えています。

大学図書館も現在、自己点検を迫られていますが、こうした視点から、あるべき姿に近づくべく努力したいと思っています。

## 2 21世紀を展望した学術研究の推進方策について

まず、学術審議会の答申のⅡ-6の「学術研究情報流通体制の整備」に注目したいと思います。

近来、情報に対するニーズが高まり、それに対応するためキャンパス情報ネットワーク（学内LAN）による情報提供が中央図書館の重要な機能となることが予想されます。

国際的・国内的にもこの学術情報ネットワークは序々に整備されており、NACSISは中核の機能を果たしつつあります。そのパートと各大学の情報センターが結び、更に学内LANにおいて各研究者が自由に学術研究情報を入手する

ことのできるよう、整備を急ぐ必要があります。これによって、大学間や分館との連携など相互協力の強化を図ることができましょう。

こうした段階を経て、電子図書館化への試みを具体的に構想しなくてはなりません。

このような方向でとりわけ必要なのは、研究上必要な資料や情報提供を業務とする専門員が配置されているということが、不可欠です。本学図書館では、それがまだまだ不足していることは言うまでもありません。この充実が私の任務の一つだと自覚しております。

## 3 新中央図書館の建設

現在の図書館は岡山大学がもつ学生・院生数及び収蔵図書数からみても狭隘であり、施設も老朽化しているといわねばなりません。従って、この整備・増築が緊要となっています。

旧来からこの整備について、高橋前学長、さらに小坂学長の熱心な推進方策があります。

とりわけ今日、景気浮揚のための財政支出が現政府によって実施され、建築物（研究用）予算請求とその実現が可能になってきました。

この中で現在約8,000㎡の増築部分が要求項目にあがっています。学長が熱心に推進しておられて、その実現も近い将来にあるように感じています。

以上の企画が進めば、キャパシティは増加するのですが、現図書館の現況は年内受入図書の内の約8.2%が館備え付けで低率であり、本学年内経費も国立大学平均の2.9%に達せず2.1%でしかありません。文教予算全体として少ないのが本質的な問題ではありますが、学内経費部分について少なくとも全国平均には到達させる必要があります。

電子図書館化の問題については、まず本学所蔵書籍の所在情報のオンライン目録検索（OPAC）が、館内及び研究室からも利用できるようになりましたが、データがまだ10万件前後で、遡及入力が今後の課題として残されています。この点は作業職員が不足していてその充足がなければ入力作業が困難である現状です。

また、ニューメディア資料のうち、今日、普

及しているのが CD-ROM です。冊子の型やオンラインデータベースの形態から、CD-ROM に変更することによって学術情報を凝縮したオンディスクサービスがパソコンの単体機で行われるようになりました。

現在、学内 LAN を介して研究室から有効に CD-ROM を利用できるサーバシステムを鋭意検討しているところです。

これらについても教員の皆さんがたの協力と、それを保障する財政措置が考慮されなければなりません。

このように変貌してくる図書館の有効利用のためには、利用者指導教育をより一層促進しなくてはならないと思われます。毎年、その指導教育期間に多くの参加者がありますので、この点は喜ばしいと思ひます。ただ、この指導には専門職員が不可欠ですが、そうした人材確保と研修の必要があります。私としてはそうした人員の配置を強く要望していくつもりです。

## おわりに

国際化、情報化の新時代の到来とともに、中央図書館の役割は研究者へのサービスとともに学生の教育にかかる情報を適切に与えることがその中心であるべきでしょう。また、地域に開かれた情報機関としての役割も課せられてくると思われます。その意味で電子図書館化は必然的な流れであるわけです。収書という点も依然として大切ですが、情報の拠点ということで、本来の図書館の在り方を見直し、21世紀に向けて大学図書館がどうあるべきかを全学的に再検討しなくてはならないと考えています。

以上のように私見を述べましたが、異なる見解をお持ちの方々も当然あるものと思ひます。諸々の意見を今後、適当なチャンスを見て、集約して行きたいと思ひます。

どうか皆様方が将来の大学図書館のありかたについて、百家争鳴していただくようおねがいしまして、就任の挨拶に代えます。

(よしなみ・たかし 附属図書館長)

最近の附属図書館利用者サービス事業実施年表

昭和62	学術情報センターと接続
63	新中央図書館構想マスタープラン策定 新図書館電算化システム稼働 岡山藩人物情報データベース「諸職交替」構築
平成元	中央図書館 CD-ROM サービス開始 ファクシミリ文献複写サービス開始
2	OPAC (「PEACH」「MUSCAT」) の構築 鹿田分館 CD-ROM サービス開始 池田家文庫藩政史料マイクロ化事業 (平成 2～4) 池田家文庫藩政史料補修 3 カ年計画 (平成 2～4)
3	改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録の刊行 (平成 3～5) 池田家文庫藩政史料のマイクロフィルムによる閲覧・複写サービス開始
4	ILL システムによる利用サービス開始 パソコンによる利用案内情報サービスの開始 (「オリープ」)
5	オンライン代行検索の一部改善 (研究者による CA のダイレクト検索)

(『岡山大学附属図書館概要1993』から再構成)



# 岡山藩研究とマイクロ化事業

泉 正 人

## はじめに

早稲田大学の研究者を中心にして岡山藩研究会が発足してから1年余が過ぎた。早大図書館が「池田家文庫藩政史料マイクロ版集成」（以下「マイクロ版集成」と略記）を購入する以前のスタートであったので、「マイクロ版集成」と取組み出してからは、まだ日が浅いが、池田家文庫のマイクロ化事業とそれに伴う諸成果に関して、若干の想いを述べたいと思う。

## 1 マイクロ化事業と「マイクロ版集成」

池田家文庫のマイクロ化事業は、史料の保存と利用提供という相反する課題に応えることを目的に行われたというが、その目的は十分に果たされていくと思われる。

マイクロ化事業が私にもたらしたものは、二つある。一つは、岡山から遠く離れていても史料を簡単に見ることが可能となったことである。しかも、6万点余の膨大な史料と向き合うことができるのである。従来であれば、重い機材（コニマイクロカメラ）を持ち、限られた時間で、限られた史料しか調査（撮影）できなかった。それに比べるとはるかに恵まれた環境になったと言える。

他の一つは、研究会が組織されたことである。複数の研究者による相互啓発は、何ものにも代え難いものがある。

利用する側にとって最も重要なことは、「マイクロ版集成」が利用・研究に耐えうるかどうかということである。限られた点数しか利用していないが、「マイクロ版集成」の出来栄は目下のところ何も問題はない。むしろ、「丁寧に撮影されているので、複写するとき枚数が多くなりコストが高くなる」といった冗談がで

るほどで、撮影の際の配慮、撮影の質の高さを感じている。封書がどのような形でフィルムに収められているのか、朱書き部分がフィルムだけで判読できるのか、付箋部分は隠れるところなく撮影されているのか、等々、マイクロ化に伴う種々の不安・疑問はあったが、それらはすべて払拭されている。

## 2 『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』

今回のマイクロ化に併せて『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』（以下『新目録』）が作成されたことは、この事業を特徴付けている。

すでに、1970年に刊行された『池田家文庫総目録』があるが、今回の『新目録』には、史料の作成年次や作成主体の情報、内容細目といった書誌的な事項が追加されており、また一件文書が明細化され、体系的な編纂物や一件文書を原秩序へ復元できるような情報が付されている。研究を行う上で、また史料選択を行う上で、多くの重要な情報が載せられたことになる。

この情報により、例えば、延宝元年(1673)に「御留帳」の項の内容が変化することが分かるのであり、さらに、それが何故行われたのか、藩政上の問題として検討すべきではないか（池田光政の致仕、綱政の襲封を機に行われたとしても）、といった研究課題をも提示してくれているのである。

このような機能を果たしてくれる『新目録』は、「総記」「国事維新」「藩土」「法制」の部門に限られている。他の部門についても作成されたらと残念でならない。

目録については、「史料に含まれた事実」に直接アクセスし、そこから必要な史料を選定でき

るよう、情報を再組織して提供する」(倉地克直「池田家文庫データベースの作成—情報の再組織・高度化—」『楷』No.12、1990年10月) ために目録全体の電子化が図られているという。ある事件に関する史料、ある特定の期間の史料、ある人物に関する史料を網羅的に抽出することが機械的に可能になれば、利用する側の浴する恩恵には計り知れないものがある。是非とも実現していただきたいと思うばかりである。

### 3 データベース「諸職交替」

「諸職交替」は、家老・小仕置をはじめ岡山藩の格制、行政的職制75種について、職種ごとに人名、就任・退任期日、石高などが記されている。幕府の『柳営補任』と同性格のものであり、岡山藩研究を行うにあたって、最も基礎的な史料の一つである。

史料には多くの人物が登場してくる。「諸職交替」で、一人一人、その役職を確認しているが、人名から役職へアプローチするには大変な労力がある。それは、「諸職交替」が職種ごとにまとめられているからである。

『柳営補任』や『寛政重修諸家譜』は索引があって初めて活用できる。「諸職交替」にも索引が望まれる。その場合、史料中には、フルネームで出てくる場合、苗字だけで出てくる場合、通称で出てくる場合など様々であるから、それらに対応する索引が必要となろう。

現在、岡山大学では「諸職交替」をデータベース化し学内オンライン検索システムとして公開稼働中である。①特定の人物の役職歴、②特定の役職(格式)の歴代と在任期間、③特定の人物の特定の年代の役職、④特定の年代に特定の役職(格式)についている人物、⑤④の場合、姓または名が不明確な場合のフルネーム、の検索が可能という(中野美智子「岡山藩人物情報のコンピュータ検索について」『史料館報』第51号、1989年)。「諸職交替」の本体と索引とを合わせ持つものといえる。これにより、人物情報検索の労が大幅に省けると同時に、漏れなく情報を処理することが可能となっている。岡

山藩研究の上で、なくてはならない道具の一つとなっていると言える。

### 4 インターネットによるDB検索

データベース「諸職交替」は、岡山藩研究になくてはならないものとなっているが、現在のところアクセスできるのは岡山大学内に限られている。

「マイクロ版集成」により遠く離れていても岡山藩研究に取り組むのが容易になったが、さらにデータベース「諸職交替」を利用したいと思うのは、やや欲張りであろうか。

『柳営補任』や『寛政重修諸家譜』を初め種々の史料は活字化されて多くの研究者、学界の共有財産となっている。電子機器の発達した今日、「旧高田領取調帳」や「維新史料綱要綱文」がデータベース化され、あるいは、されつつあるように、近世史料をデータベース化して学界の共有財産とし、より一層の研究の進展が図られようとしている。データベース「諸職交替」は、このような動向の先端を行くものであり、CD-ROM化やインターネットによって、広く研究者、学界の共有財産になることが望まれているのではないだろうか。

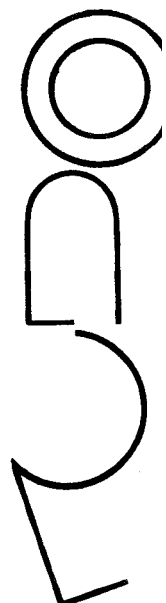
計画されているという『改訂増補池田家文庫マイクロ版史料目録』の電子化についても同様なことが言えよう。

### おわりに

『新目録』の電子化、データベース「諸職交替」のCD-ROM化やインターネット化は、私たち岡山藩研究者にとって計り知れない恩恵をもたらすことは間違いないことである。それだけにとどまらず、さらにこれが引きがねとなり、他の多くの機関において、数多くの史料群についても同様な試みが行われて、新たな研究環境が創り出され、学界全体の研究をさらに進展させていくことになるのではないだろうか。

(いずみ・まさと

早稲田大学大学史編集所編集員)



# 情報を「届ける」図書館 — 利用者の願い —

室谷洋三

今夏は国際交流基金の援助を受けてイギリス文学の地誌的・歴史的背景の調査をするために40日間イギリスに滞在した。フィールドワークが中心であったが、各地の図書館にも非常にお世話になった。訪ねた図書館はOxford大学のBodleian Libraryや、ロンドンのSt. James's SquareにあるLondon Libraryなど10指に上るがいずれも多くの蔵書を誇る立派な図書館であった。

しかし難点がないわけではない。たとえば、Bodleyの愛称で親しまれているBodleian Libraryの蔵書数は莫大である。それを入れておく書庫はほとんどが地階にあるが、それはまるで蜘蛛の触手のように図書館の敷地を越えて道路やいろいろなカレッジの構内にまで延びている。そのために借り出しの手続きをしてからそれが手元に届くまで数時間かかることもまれではない。

一方、London Libraryはイギリスで唯一の会員制の私立の学術図書館である。蔵書の数、職員的能力、利用者へ便利な立地条件など理想的な図書館であるが、問題は会費である。ちなみに、年会費は100ポンド、終身会費は下記のように年齢別になっている。

24歳以下 2500ポンド 25～29歳 2350ポンド…  
60～64歳 1300ポンド 65～69歳 800ポンド  
70歳以上 500ポンド

終身会費が年齢別になっているのは合理的といえ合理的だが、若手の研究者にはかなりの負担に違いない。

会費のことはともかく、世界各地のすべての図書館が、Bodleian Libraryや、London Libraryと同じ蔵書を持つと思うのは愚かなことである。情報網がかつてないほど発達した今日、図書館が果たすべき役割も変化して当然で

あろう。つまり各図書館はそれぞれ独自の見識をもって特定の図書を所蔵するよう努めると共に、それらの図書に関する情報をネットワークにのせ、来館者だけでなく、遠隔の地にいる利用者へもFAXその他の方法でサービスすることが重要な任務となってきている。

本学の中央図書館においても図書に関する情報サービスの充実の重要性については早くから認識され、徐々に充実してきている。しかし、その足並みは決して速やかとは言えない。その原因はどこにあるのであろうか？ 専ら資金不足にあると言えよう。その抜本的解決は国の学部中心の予算配分方法の改善を待つしかないが、それまで手をこまねているしかないのであろうか？

ところで教養部英語科には現在5名の外国人スタッフがいますが、そのスタッフからMLA(英文学・英語学に関する学術雑誌の目録)のCD-ROMを購入してはどうかという助言が寄せられた。英語科だけでも購入できないことはない価格であったが、事の性質上、中央図書館に備えるのが好ましいと判断し、教育学部の英語教育科と文学部の英文科と相談した結果、三学部共同で購入することになった。おかげで経費も三分の一で済み大助かりであったが、ひょっとしたら、情報サービスの充実のための多くの立派なプランを持ちながら、予算不足で実現できずにいる中央図書館の現状の一助に、この方法はなるのではないかと思ったりしている。

図書館の業務は多岐にわたる。(1)図書の貸出、(2)情報検索サービス、(3)国内・国外の各地の図書館との交信、(4)文献のデリバリーサービス、等々。しかし、このような業務を円滑に運ぶためには職員の能力の向上と共に、十分な予算的な裏付けが必要である。全学の理解と協力により、それらが満たされ、特に(2)～(4)のサービス部門が充実し、中央図書館が利用者の訪問を「待つ」だけではなく、利用者へ有用な情報を「届ける」図書館に、一日も早くなることを願ってやまない。

(むろや・ようぞう 教養部教授)

# PA から PsycLIT へ

古市 裕一

心理学関係の文献検索用二次資料として、アメリカ心理学会の発行している Psychological Abstracts (PA) がある。1927年に創刊されたもので、特定の文献の検索はもちろん、さまざまなテーマについての研究動向の把握に不可欠の資料といえる。筆者も学生時代から頻繁に利用してきた。また、学生や院生にもその利用を勧めてきた。しかし、心理学の飛躍的發展に伴い、最近では1巻あたりの収録件数が4万件、重量も別冊の Index を含めると、10キロを越え、PA による文献検索には、根気と相応の体力が必要となってきた。

ただ幸いなことに、PA の内容は、1967年以降のものがデータベース化され、DIALOG 社のオンライン式商用データベース、PsycINFO として、中央図書館でも1980年より利用できるようになった。筆者がこれを最初に利用したのは1985年のことであるが、その便利さには驚嘆したものであった。しかし、この PsycINFO にはいくつかの難点があった。第1はコストの問題である。接続時間や出力件数にもよるが、1回あたりの使用料が1万円を越えることも多く、学生に自由に利用させるというわけにはいかなかった。第2は、検索が図書館係員による代行検索のため、検索結果に多少とも不満が残るということであった。もっともこれらのことは、1989年以降、順次導入された CD-ROM データベース、ERIC と MEDLINE を利用し、それとの比較で感じたことであった。

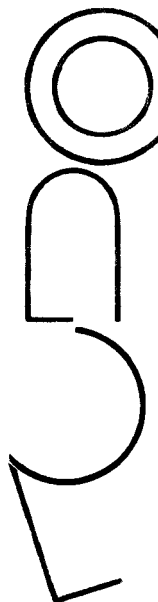
ERIC は教育学関係のデータベース、MEDLINE は医学関係のデータベースであるが、筆者の専門領域が教育臨床心理学ということもあって、両データベースともかなり利用価値の高いものであった。検索方法は単純で、本年度からは大学院の授業の一環として利用法について

の指導を行い始めた。無料で利用できることや直接検索が可能なことなど、PsycINFO に優る点は少なくなかった。

ERIC および MEDLINE を利用するなか、その有用性を実感するとともに、やはり心理学のデータベースが欲しいという気持ちが強くなってきた。ちょうどそのとき、PsycLIT 共同利用の提案が教育学部社会心理学講座の田中宏二教授よりなされた。PsycLIT は前述の PsycINFO をもとに構築された CD-ROM データベースであるが、年間の使用料が58万円と、個人はもちろん、1、2の講座では利用可能なものではなかった。田中教授の提案は、費用は本学の心理学関係の教官18名の共同負担とし、設置・利用場所は中央図書館とするというものであった。この提案は大方の賛同を得て、来年度より共同利用が実現する運びとなった。近年の心理学の発展と細分化は各種のジャーナルの創刊をもたらししたが、校費の大幅な増額が期待できない現在、それらを新たに購入していくことは不可能に近い。それゆえ、世界の研究情報を迅速にキャッチしていくには、適切な二次資料の活用が不可欠であり、今回の PsycLIT 共同利用に寄せるわれわれの期待はきわめて大きい。

しかし、中央図書館での利用という方法については難点がなくはない。たとえば、利用時間帯が限られていること、わざわざ図書館に足を運ばなければならないことなどである。また、データベースが充実し、利用者が増大してくると、現行の専用パソコン2台でのスタンドアロン方式では、早晚、順番待ち、1回あたりの利用時間の制限といった事態に陥ることは目に見えている。これらの問題への対処には、図書館に CD-ROM 用のサーバを設置し、学内 LAN を経由して研究室の端末から CD-ROM データベースに直接アクセスする方式の採用が必要だといえる。サーバ設置に要する費用は1千万円程度と聞く。図書館が「図書」館から「学術情報」館へと発展することが求められているいま、関係各位の英断を期待したい。

(ふるいち・ゆういち 教育学部助教授)



# 研究者自身による CA オンライン検索

大塚 正人

これまで、私は、ある研究テーマについて調査する場合、主に CA の冊子体を用いてきた。必要な情報を正確に取り出すには、かなりの根気と時間が必要だが、細かい字を目で追っていくと、自分が捜している情報以外にも興味深い内容を見つける場合がたまにあり、私はそれなりに満足していた。当然、商用オンライン情報検索も DIALOG で、CA オンラインが利用可能ではあった。しかし、その利用料金が高額であること（ちょっと複雑な検索で1万円程度かかる）や、検索専門家（サーチャー）に代行検索をお願いするときに、私の説明不足か、どうしてもうまく検索が進まないことが何度あった等の理由から、オンラインのデータベースを利用することは年に2、3回しかなかった。また、利用したとしても、冊子体での検索漏れをチェックする程度の目的でしか利用していなかった。

このたび、図書館で DIALOG による CA のオンライン代行検索が不可能になった。図書館の業務である学術情報の代行検索の一つが利用出来なくなったということは、利用者としては非常に残念である。必要ならば各学部や各研究室で対応をしなければならなくなったわけである。頻繁に CA を利用していた利用者はもちろんのこと、年に数回しか利用していなかったユーザにも、いや、そういうユーザにとってこそ一大事であったと思う。CA をオンラインでひくためだけに、新たにハードを購入し、一からその使用方法を習得していくということは、結構大変なこともかもしれない。

ところが私が実際に CA オンラインを利用するための準備を進めていくと、比較的簡単に出来るということが分かった。以前より、他の研究室の先生や、海外の研究者と電子メールの

やりとりをしていた経験が生かされたようだ。しかも、STN では、冊子体を購入している大学の研究者が CA オンラインを直接利用する場合にはかなりのディスカウント料金が適用される（岡大の場合、8割引）と知り、出来るだけ早く利用したいと思った。

今回、STN の ID 番号を取得し、実際に検索を行った経験についての感想を述べる。

STN の CA ファイルにアクセスするのに必要なものは5つある。コンピューター、通信モデム（標準的なもので2万円位）、電話回線、通信ソフト（無料で高機能のものもある）、そして STN の ID 番号である。岡山市から一番近いノード（ホストコンピューターへのアクセスポイント）は、高松市にある。STN の説明書に書いてあるノードの電話番号をあらかじめ通信ソフトに定義しておく、自動的に通信ソフトが回線を接続する。さらに接続時のコマンド、ID、パスワードを登録すれば、CA ファイルのコマンド入力ラインまで自動運転することすら簡単に出来る。このあたりのことは STN の説明書に詳細に載っており、初めてアクセスするときに非常に役立った。

CA ファイルを選んだ後、実際の検索をする場合には、検索例の資料がたいへん参考になった。CA のコマンド体系は単純なので、全くコマンドを知らなくても、基本的な検索をする上では、検索例を見ながら行えば、失敗なく検索できた。数回検索してみたの感想だが、思ったよりも簡単で、図書館で MEDLINE 等を CD-ROM でオンディスク検索したことのある人なら、容易に利用出来るのではないかと思った。

最近、学術情報の肥大化が進んでいる。特に単行本や雑誌という形態のものよりも、電子的形態、即ちコンピューターを用いて検索・閲覧するような学術情報の爆発的な増加が目立つ。こうした中で、研究に必要な情報を「情報の大海」の中から出来るだけ早く、かつ正確に捜し出すことが重要である。そういう意味からも研究者自身がオンライン検索をするということももっと当たり前のことになって来るべきかもしれない。（おつか・まさと 薬学部助手）



# 理学部情報検索コーナーの 設置と現状

前田 裕宣

## はじめに

附属図書館広報委員会から、理学部情報検索共同利用コーナー設置に関して、その経緯と利用者の声についての原稿依頼があったので、河原・佐竹両先生の協力を得て理学部の現状を紹介することにしたい。

## 1 理学部情報検索共同利用コーナー設置の経緯

今年1月25日、附属図書館においてオンライン文献検索サービスの変更に関する説明会と、STN International (以下、STN) 化学分野の入門研修会が行われた。

それは、Chemical Abstracts (以下、CA) ファイルのオンライン代行検索サービス業務の停止とそれに伴う各ユーザによるダイレクト検索の導入に関するものであった。

附属図書館の事情説明は、化学分野のオンライン代行検索利用は現在最も多く、全体の3分の1を占めているが、検索には高度の専門知識を必要とし、かつ使用料金も高額であり、人手不足、研修費不足に悩む図書館ではサーチャーの養成に苦慮している。そこで、従来の利用システムである DIALOG に変わり、国内の化学分野の大学関係ユーザがダイレクト検索をする場合に限り、大幅な大学割引制度を適用している STN を紹介するというものであった。

このシステムは、日本・アメリカ・ドイツをネットワークで結んだ総合的な科学技術情報のオンラインシステムで、日本の代理店は社団法人日本科学情報協会、サービスネットは JICST (日本科学技術情報センター) である。

ところが、われわれユーザによるダイレクト検索実施のためには、外線電話の確保、モデム・通信ソフトの準備など、環境整備が必要であ

った。本来は、各ユーザが研究室の端末から自由に利用できる環境が好ましいのだが、現実には個人でこれらの設備を整えるのは大変である。

その頃理学部では、計算機端末委員会が中心になって、学部内の教育実習用端末の整備計画が進行していた。この委員会において上記の問題が検討され、理学部情報実習室に情報検索コーナーを設置し、共同利用設備としてサービスすることが決定された。

具体的には、附属図書館参考調査係と理学部事務部の協力で環境整備が進み、利用のためのパスワードの取得ができた7月13日、いよいよ JICST から講師を招いて、最初の講習会を行った。現在、大学割引制度の適用時間帯(夕方から深夜、及び早朝)に2台の端末機を専用に供し利用されている。

スタート後、さらにオンライン検索に関心を持つ学生2人に、7月27・28日の両日 JICST 主催の STN 研修会(中四国地方では広島市で開催)への参加を依頼し、より高度な利用方法を習得してもらった。次回からは彼らの協力を得て、年1~2回、基本的な操作方法、よく使用するコマンドなどについての簡単な講習会を開催し、利用者の便宜を図りたいと思っている。

(まえだ・ひろのぶ 理学部助教授)

## 2 利用者の声

### 鉱物学分野での CA 検索

山川 純次 河原 昭

私たちは鉱物とそれに関連した無機化合物の合成及び結晶構造の解析について研究を行っており、自分たちの研究に関連した現在の世界の研究状況を常に把握しておかなければならない。

これについて現在文献情報が最も完備しているのは CA であるので、時々これを利用して。従来は DIALOG による検索を図書館の



参考調査係に依頼していたのであるが、本年4月より理学部情報実習室(旧第7講義室)のパソコン端末からの検索が可能になったので、現在はSTNによりこちらを利用している。

DIALOGと同様STNの操作コマンド体系は大規模なものなので、全容の把握は容易ではない。しかし私たちが行う通常の実験は少数の命令のみを使用すればなんとか間に合うので、これらの命令のメモ書きを頼りに検索している。

STNがダイレクト検索により利用可能になったので、次のようなメリットが生まれた。

まず、通常夜間及び早朝の大学割引制度の適用時間帯での利用が可能になり、検索コストは大幅に軽減した。

次に、必要な思いついた時に随時検索できるようになった。ただ、課金はディスプレイ形式、すなわち表示行数に比例するので、最終的な該当件数が多いときには文献番号のみをプリントさせ、学生を動員して人海戦術で中央図書館のCAによりさらに詳しい情報を得ている。

このように新システムによるダイレクト検索は、私たちが素人でも十分に実行可能なものであり、メリットが大きい。しかし逆に、より効率のよい検索を行うためには高度な利用を実行している人のアドバイスは必要であろう。いわゆる指導者としてのベテランサーチャーの重要性がますます増大しているように思われる。

(やまかわ・じゅんじ  
自然科学研究科博士課程3年)  
(かわはら・あきら 理学部教授)

## 習うより慣れろの文献検索

佐竹 恭介

理学部では、これまで中央図書館の情報検索係員にお願いしていた文献のオンライン検索が自分でもできるようになった。というより、否応なく自分でせざるを得なくなったというのが

正直な感想のようだ。

化学分野では、各国で出版されている学会誌・専門誌などの第一次情報に加え、ドイツのバイルシュタインやアメリカのケミカルアブストラクト(ケミアブと略称している)に代表される第二次情報は必須である。ことに近年、情報量が飛躍的に増大するにしたがい、迅速かつ正確な一次情報源の検索や、専門分野における研究の流れの全体像を短時間で把握するために、第二次情報の重要性は増大してきた。これまで、われわれは主にペーパーメディアで前述の第二次情報に馴染んできたが、目的達成のためにはオンライン検索がアイライン(?)検索より迅速かつ網羅的である場合が多い。にもかかわらず、自分でオンライン検索をやるとなると、なかなか越え難いものがある。

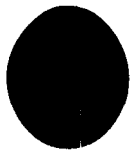
すなわち、われわれにとっては排他的とも思える専門用語が多い。例えば通信回線・モデム・通信プロトコル・ターミナルソフト・通信端末などなどである。さらに、学会の際に併設される機器展での検索デモンストレーションで、オペレーターが機関銃的タイピングで意味不明の検索コマンドを打ち込み、挙句の果てに「見つかりませんねえ」という風景を見ると、「やはりアイラインがいい」と思ったりする。

情報化社会というのはよくしたもので、先の排他的な専門用語は、本来の意味が解らなくても身近なものになっている。

今、普及しつつある、パソコン通信が可能なセットがあれば、そのままオンライン検索が可能だし、ターミナルソフトもパソコン通信で流通しているフリーウェア(無償ソフト)が十分に使えることが判った。また、検索の専門オペレーターの機関銃よりも、研究者自身により検索を行ったほうが「見つかりませんねえ」というケースが少ないようだ。

要するに、使用するデータベースの癖と自身が必要とする情報をうまく合わせれば良い結果が得られる。習うより慣れろの世界がここにもある。

(さたけ・きょうすけ 理学部助教授)



# オリーブ: OLIVE 現状と課題

山田 敦

## 1 はじめに

「図書館は、明日は開いていますか」とか、「本を借りたいけど、どうしたらいいですか」ということをよく聞かれます。このような質問に、パソコンで答えるようにしたシステムが、「オリーブ: OLIVE」と命名された図書館の案内システムです。このシステムは、図書館案内が、メニュー形式で出ていて、これを利用者がマウスで選択していくことによって求める情報に到達できるという形になっています。現在、図書館の1階と2階で常時利用することができます。

当初、職員がいない時でもある程度のこと分かるようにということや、従来の印刷物にかわる新しくて分かりやすい利用案内をということを主眼にシステム開発を進めてきましたが、昨年の9月にデビューしてからほぼ一年経ちましたので、ここで、その現状についてシステムの特徴を整理し、今後の課題についてまとめてみたいと思います。

## 2 What's Olive? その特徴

このシステムは、マッキントッシュ (Mac) というパソコンで作成してあります。この今までは多少趣の変った Mac というパソコンの特徴のいくつかは、そのまま「オリーブ」の特徴になっています。以下に、このシステムの特徴的な点をまとめてみたいと思います。

### ・ Interactive

「相互に作用し合う」と言うのがインタラクティブの意味ですが、コンピュータと対話しながら必要な情報に到達するという意味で、このシステムはインタラクティブな利用案内といえます。

インタラクティブであるということは、多くの情報の中から、必要なものをユーザがみずから選択できるということで、使う人に合わせた案内が可能であるということが言えます。今までは、パンフレットや冊子の利用案内やオリエンテーションという形で図書館の利用方法について案内してきましたが、このシステムのインタラクティブな特徴を生かして、よりきめ細かな案内が可能となったといえます。

### ・ Multimedia

今はやりのコンピュータ・グラフィクスというものを、このシステムでは使っています。言うまでもないことですが、「百分は一見にしかず」というように、図のほうが分かりやすいということが図書館を紹介する時にもあります。たとえば、複雑怪奇な本の並べ方なども、3Dグラフィクス(プロ野球ニュースのような)を駆使して説明すればよくわかるのではないのでしょうか。マルチメディアという場合、説明する事柄にもっとも適したメディアを使えるということがこのような案内システムを作る場合大きな利点といえます。

このシステムでは音楽、ナレーション、絵、写真、マンガ、コトバなどさまざまなメディアを使って、なるべくわかりやすくということを目指しています。AND検索などの説明の際によく使われる「ペン図」のような一目瞭然!というものを、いろいろなメディアで考えています。余談になりますが、色々なメディアとともに色々な悩みもしょいこんだようです。今までの印刷物であればレイアウトやカットに苦労していたものが、このシステムでは、絵の形や画面の配置や色合いに苦労するということが、実は、システム作成の8割以上はこういっ



たことに費やしているのです。

#### ・ Simple

主に、作成の点からですが、要するに簡単ということが特徴として上げられます。ワープロと同じくらいの簡単さで、逆に言うとそれ以上難しいことはやらないという方針でこのシステムはできています。作成環境としては、たまにバクダンが出て動かなくなる以外は、膨大なマニュアルも面倒なドキュメントもない夢のような環境といえます。簡単であることは、作成方法としても、できるところから始められるということで、いわゆるボトムアップ的なシステムの作成が可能となっています。また、簡単であれば、いかなる状況にも対応できるということでフレキシブルという特徴もあると思います。更に、パソコンにしるオフコンにしるコンピュータといえば特定の人のものという印象が強かったのですが、簡単に扱えるMacの出現で図書館内の誰もが参加できるという状況ができました。こうなれば、そのうちに抜群のセンスを持った新人の出現ということも期待できるのではないのでしょうか。このシステムの最初のメニューである「Library Guide」が、約2週間の作成ですぐにデビューとなったのもこれらの特徴があったからと言えます。

#### ・ Interface

現在のインフォメーションシステムでは、たとえば2階の案内図を出して、その中のCD-ROM コーナーを選ぶと画面が変わり、どんなCD-ROMがあるのかという一覧画面が出ます。更に個々のCD-ROMを選択すると、それについての説明が出るようになっていきます。

さて、ここで考えられるのは、そのまま実際に検索が行えると便利ではないかということですが、こういうことができるようになるためには今のシステムから別のシステムに行ってもた戻ってくる、あるいは別のシステムを制御する、ということが必要になります。これは、このシステムの特徴というより、可能性ということですが、現在、実験段階です。「簡単に」という方針から逸脱するということがありますが、ぜひ実現したいものです。

この機能は、利用案内という側面からみても、システムの説明を行ってから、実際に検索を行ってみることができるということで非常に有効だと考えられます。

この他に、いろいろなシステムを渡り歩けるならば、図書館情報システム全体のインターフェイスとして「オリーブ」が発展するということにもなると思います。

以上、これからこうしていくのだという希望も含めて、このシステムの特徴について整理してみました。なお、このほかにひとつ補足すると、オリエンテーションや各種講習会などの補助ツールとしての利用が有効であるということです。これは、現に今春のオリエンテーションで、現在のメニューの中から適当なものを選んで使用してなかなか好評でした。こうした説明会での利用は、担当者の労力の軽減はもとより、説明の均一化や、システムティックなオリエンテーションの実現に有効な道具であるといえます。

### 3 Towards One! 今後の方向

このシステムでは、利用する人の意見も取り入れるため、さまざまな機会にアンケートを取ってきました。その中には、「すごい」「わかりやすい」という感想とともに、「情報がいまいち」に代表される情報の量や質についてのものと、「こんなんじゃないない」に代表されるMacの機能的な点についてのものが注意を引きました。今後のシステムを考える上で、ここで、「いまいち」と「こんなん」について考えてみたいと思います。

「いまいち」というのは、いまいち少ないと考えて見ました。確かに、現在の「オリーブ」は、初めて図書館を利用する人を対象にしたメニューが主となっています。これは、現在開発中ということでしたしかたないところもありますが、情報の量という点からは現在の300画面の3倍から4倍あれば、さまざまな利用者を想定しても一通りのことは説明できるのではないかと考えています。操作性ということや、ハード的な制約からも、利用案内システムとしては

それくらいを目標にしています。

案内システムを越えた、より複雑な情報の提供ということとなると、他のシステムを介してということが考えられます。たとえば、案内システムからオンライン目録や CD-ROM システムを介して情報を提供するということがありますが、ひとつの画面でいろいろできるというのは便利ですし、昨今の流れでもあります。また、文字情報をベースにした、いわばレファレンスデータベースというもので解決するということが考えられます。前述のインタラクティブな特徴をうまく利用して、利用者も直接システムに参加できて、自然に大きくなるようなデータベースの出現が期待されます。

「こんなん」に代表される意見は、Mac の機能を生かし切っていないということ。たとえばもっと高度なグラフィクスを使ったとか、インタラクティブな特徴をもっと生かしたらということや、電話回線や LAN を介しての利用ということが考えられます。

このうち、LAN の利用については、より身近になっているので、ここで少し述べたいと思います。

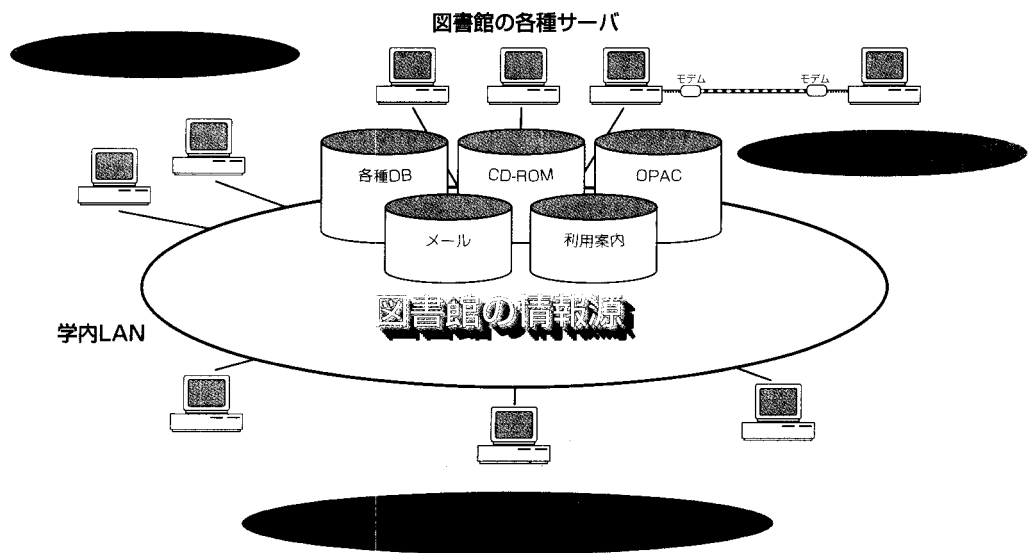
現在、全学的に LAN の見直しが計られてい

ますが、図書館でも来春にむけて CD-ROM をベースとしたシステムを準備中です。図書館が LAN を経由して行うサービスはいろいろ考えられますが、その第一段階は CD-ROM であるということです。当然のことながら、「オーリーブ」も LAN 経由でということが考えられます。利用案内システムだけでなく、それを含めた図書館が電子メディアによって行うサービスのインターフェイスとして、いつでも、どこでも、誰でも、ひとつの画面で利用できるように「オーリーブ」が発展していけば、もう「こんなん」とは言われなんでしょう。

#### 4 おわりに

インテリジェントライブラリとかエレクトロニックライブラリということが言われて久しいのですが、このシステムに携わって、それが少し実感できたようです。かのニュートンはリングが落ちるのを見て大発見したということですが、毎日リンゴのマークを見ているプロジェクトチームの面々は、どんな発見をするのでしょうか。

(やまだ・あつし AVインフォメーションチームリーダー  
情報サービス課 雑誌係長)



学内 LAN による図書館サービスのモデル



## 池田家文庫マイクロ化完成記者発表

平成4年度をもってマイクロフィルム撮影作業を完了し、全巻が国内外に頒布される運びとなったので、4月14日午前11時～12時、附属図書館3回演習室で、萬成館長らが記者発表を行いました。事業の詳細は『楮』前号をご参照ください。

リフレッシュしました。図書館整備・充実計画表や、今春終了した池田家文庫マイクロ化関係の報告のほか、特色ある利用サービスに、AVインフォメーションサービス、利用指導サービスが登場し、コレクションにオンディスクソフトが加わりました。

## 「オリーブ」その後 一層の充実 —パソコンによる図書館利用案内—

## 改訂増補マイクロ版史料目録の刊行

既刊の『総記』『国事維新』『藩士』（4分冊のうち2～4）に続き、「藩士1」が6月に刊行されました。A4版 18,303p 9,600円。

なお、今後は「法制」が「行政」分野の誓詞を合わせ11月に刊行される予定です。マイクロ化に伴う池田家文庫目録改訂事業はこれで終了することになります。

今年度から新たに2階に設置したマッキントッシュには椅子を置いてみました。一人で、じっくりと点検していく学生や、何人か集まってガヤガヤと見ているという光景が目につくようになりました。「オリーブ」もようやく浸透してきたようです。

前号でお知らせしたOPACとカード目録の使い方のメニューが完成しました。

OPACの画面メニューは次のように12の選択肢からなっています。

## 活用されるマイクロフィルム

平成4年度までに受贈した全2,486リールのマイクロフィルムの利用は、平成5年度前半期で、延べ651リール、コピー利用は11,641枚に達しました。

月	人	リール	コピー枚数	月	人	リール	コピー枚数
4	14	66	1,202	7	28	102	1,991
5	24	94	1,604	8	26	196	2,163
6	29	104	3,086	9	21	89	1,595

## 『岡山大学附属図書館概要1993』発行

平成3～4年度の図書館活動業務報告として9月に発行、B5版、44ページ、レイアウトを

- |            |          |
|------------|----------|
| ・オンライン目録とは | ・図書館の検索例 |
| ・検索の範囲は    | ・雑誌の検索例  |
| ・検索語とは     | ・前方一致とは  |
| ・AND検索とは   | ・検索の流れ   |
| ・画面の構成は    | ・人名での検索は |
| ・キーボードの使い方 | ・Q&A     |

平成5年度は4月16日から30日にオリエンテーションを実施しましたが、OPACについては初めての試みとして、このメニューを使ってあらかじめ係員が説明をし、その後に端末の実習を行いました。この方法によると、学生たちは検索システムの全体像やロジックがよく理解できると見え、端末実習はおもいがけなく効果があがり、係員の負担も軽く、ユーザの感想も大変好評でした。

今後は、授業単位の案内が多いので、プロジェクター等で画面を拡大して見せる配慮が必要です。設備の充実に、学内の一層のご理解、ご支援をお願いしたいと思います。

その他、内容的には、鹿田分館と資源生物科学研究所分館のフロア案内を作成し、将来的には分館にも「オリープ」をと計画中です。

また新メニューの作成や改良など、AVインフォメーションチームのメンバーが毎週火曜日に集まり、より充実した使いやすいものにしていく努力を続けています。

## 待たれる CD-ROM サーバの設置

### —鹿田分館利用者の声—

鹿田分館では CD-ROM 用パソコンが増設され、今年 4 月から 8 月までの延べ利用者は 1,620 人で、増設前の 1.6 倍となりました。津島地区からの利用（特に薬学部）も増加しています。

その対応策として時間制限や予約制を導入していますが、満足できる結果がでるまで、何度も検索室に足を運ぶという例も少なくありません。また、ダウンロードしたものを後で見るのは 2 度手間という意見もあります。さらに、図書館閉館中はいつでも利用できるとはいえないので、ユーザが随時思うようには利用できないと

いう不満をさくようになりました。

キャンパス LAN での検索経験者には一層不便が感じられるようです。5 月に実施した利用調査では回答者の全員が「研究室にいて利用できたらよいと思う」という意見でした。

各地の医学系図書館では LAN による CD-ROM サーバシステムが稼働し、研究室にいないがいつでも検索できるという方向でサービスの拡大が図られています。鹿田地区でも歯学部教官を中心に LAN 研究会ができて、この方面への関心が高まっています。

## 大原農書文庫貴重書のマイクロ化に着手

### —資源生物科学研究所分館—

大原農書文庫は、岡山大学農業生物研究所（現研究所の前身）が財団法人大原農業研究所から引き継いだ蔵書の一つで、大正 10～13 年にかけて収集された農業・本草学に関する漢籍と農書のコレクションです。本草関係の漢籍、漢籍の和刻本、及び日本の近世期・明治期の農書を特色としており、約 3 千冊の規模です。昭和 62 年に附属図書館から『大原農書文庫・古医書集成目録』を刊行しています。

この度保存対策として点検調査を実施し、この文庫の中でも特に重要とされる、青木昆陽著『昆陽漫録』の補修とマイクロ化を実施しました。

## 会議 22

### ◆ 学 外

- 4.22～4.23 第 41 回中国四国地区大学図書館協議会総会（於山口大学）
  - ・授業週 5 日制に伴う土曜日における開館の状況について、その他
- 4.23 第 20 回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会（於山口大学）
  - ・図書館における自己点検・評価の今後の対応について、その他
- 6.8 平成 5 年度国立大学附属図書館事務部課長会議（於東京医科歯科大学）
  - ・大学図書館の当面する諸問題について、その他
- 6.22～6.24 第 40 回国立大学図書館協議会総会（於徳島大学）
  - ・次世代の図書館コンピュータシステムについて
  - ・学術情報センターにおける研修の強化に関する要望について
  - ・ニューメディアの活用と今後の課題について
  - ・生涯学習への対応—社会・地域への公開について、その他
- 7.5 岡山県図書館協会総会（於岡山県総合文化センター）
  - ・平成 5 年度事業計画（案）、収支予算（案）について、その他



- 9.21～9.22 第6回国立大学図書館協議会シンポジウム(於神戸大学)
  - ・NACSIS-ILL サービスの現状と課題について、その他
- 10.13～10.14 平成5年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会(於鳥取大学)
  - ・選及入力に関する諸問題について、その他
- 10.27～10.29 第34回中国四国地区大学図書館研究集会(於高知大学)
  - ・利用者のための図書館について、その他
- ◆ 学内
- 4.15 第5回附属図書館電算機仕様策定委員会
- 4.19 平成5年度第1回全国共同利用図書資料(大型コレクション)取書計画に関する小委員会
- 4.20 第6回附属図書館電算機仕様策定委員会
- 5.10 第1回附属図書館CD-ROMサーバシステム検討委員会
- 5.14 平成5年度第1回AVインフォメーションシステム検討委員会
- 6.3 平成5年度第1回附属図書館広報委員会
  - ・平成5年度の活動方針について、その他
- 6.15 平成5年度第2回AVインフォメーションシステム検討委員会
- 6.17 平成5年度第1回附属図書館運営委員会
  - ・平成5年度図書館資料購入費配当予算額(案)について、その他
- 7.7 平成5年度第2回附属図書館広報委員会
  - ・館報「楷」No.18の編集について
- 7.20 平成5年度第3回AVインフォメーションシステム検討委員会
- 9.16 第5回岡山大学新中央図書館建設企画委員会
  - ・岡山大学新中央図書館の建設について
- 9.29 平成5年度第1回附属図書館資料選択委員会
  - ◇ 平成5年度第4回AVインフォメーションシステム検討委員会
- 10.8 平成5年度第3回附属図書館広報委員会
  - ・館報「楷」No.18の編集について
- 10.14 平成5年度特別図書選定小委員会
  - ◇ 平成5年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」(人文・社会科学系)選定小委員会
  - ◇ 平成5年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」(自然科学系)選定小委員会

## 研修 〇〇

- ・平成5年度事務系職員初任者研修
  - 参加者 寺本智美 渡壁辰巳(4.21～4.26)
- ・平成5年度DIALOGシステム研修会
  - 参加者 寺本智美(6.2)
- ・平成5年度JOIS研修会
  - 参加者 寺本智美 佐藤純子(6.21～6.23)
- ・平成5年度岡山大学事務系職員語学研修
  - 参加者 中野美智子 坂井修一(7.13～9.9)
- ・第3回JST研修
  - 参加者 古中秀子(8.31～9.3)
- ・平成5年度目録システム講習会
  - (地域講習会 於岡山大学)
  - 参加者 花田貴子 井並美奈子 則武直美 谷口尚美 石原美代子 小橋靖子 坂根祐介(8.2～8.6)
- ・平成5年度国立学校事務電算化講習会
  - 参加者 山中康行(9.28～9.30)
- ・平成5年度中国四国地区国立学校等会計事務研修会
  - 参加者 花室紀之(10.25～10.29)

## 編集委から〇〇

今年はずつと夏と秋の境目にも苦勞する年でした。本号は「図書館から情報館へ」を特集テーマとしました。ここには図書館に対する期待と要望が存在しています。われわれはこれをしっかりと受けとめ、図書館機能の一層の改善に努力していきたいと思ひます。

「池田家文庫マイクロ化事業」とそれに伴う諸成果について、学外のユーザに寄稿をお願いしました。図書館が情報発信の基地となりえたかどうか今後の評価が待た

れます。ユーザからは目録改訂事業に関し、更なる期待が寄せられました。

オリーブはユーザと図書館とを結びつける接点に位置づけられます。メニューを増やし、豊富な情報を持たせて、ますます充実発展させる予定です。利用者のニーズに的確に答えていくことが何より肝要であり、今後とも新たなチャレンジを続けていきたいと思ひます。一層のご協力をお願いいたします。(委員長 山中康行)

岡山大学附属図書館報「楷」 No.18 平成5年10月29日  
 発行人 森岡祐二 編集 広報委員会 表紙デザイン・レイアウト 清水國夫  
 岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話086-252-1111